

ふりがな いとう あき
氏 名 伊藤 亜希
学 位 博士 (歯学)
学位記番号 新大院博 (歯) 甲第 96 号
学位授与の日付 平成 19 年 3 月 22 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
博士論文名
 顎変形症患者の人格特性
 —MMPI、自尊心尺度を用いた分析—

論文審査委員 主査 教授 齊藤 力
 副査 教授 高木 律男
 教授 齋藤 功

博士論文の要旨

【緒言】

顎矯正手術の目的は、良好な咬合を作るための骨構造を獲得し、できるだけ対称的な顔面形態を得ることであるが、実際には顎変形症患者の機能面、形態面だけでなく心理面にも大きな変化をもたらすことが知られている。

近年、顎矯正手術は社会的認知度の上昇とともに症例数が増加し、形態異常の改善に対する期待が大きくなる傾向にあるが、顎変形症患者の顔面形態と人格特性との関連性にはいまだに不明な点が多い。そこで、顎変形症患者の変形の違いによる人格特性への影響を調査することを目的とし、顎矯正手術前後における患者の心理学的測定を行い、検討した。

【対象および方法】

対象は、2004 年 1 月から 2006 年 3 月までに都立大塚病院で顎矯正手術を施行した、男性 16 名、女性 36 名、計 52 名の顎変形症患者で、平均年齢は 26.3 歳であった。これらに対し、術前および術後約 6 か月経過時に心理テストを行った。心理テストには、質問紙法による人格テストの一つで精神医学的診断の客観化を目的とした MMPI (ミネソタ多面的人格目録) と、自己への尊重や価値を評価する程度を測定する Rosenberg の自尊心尺度 (山本ら訳) を選択し、それぞれをほぼ同年代の日本人を対照として比較した。また、顎顔面形態の特徴より、対象を下顎前突群 33 名、上顎前突群 5 名、開咬群 3 名、非対称群 11 名の 4 群に分類し、心理テストの得点と顎変形との関連性についてノンパラメトリック検定 (Kruskal Wallis 検定) により分析した。さらに術前後の心理テストの得点変化について T 検定を行った。

【結果および考察】

術前における顎変形症患者の MMPI の平均得点は、対照に比べ大差はみられなかった。一方、自尊心尺度では、対照群と比較して若干高い得点を示していたことから、顎矯正手術を受ける患者の大部分は自分の顎変形の状態や治療の必要性を的確に認識しており、変形に対し自尊心を損なうほど強い劣等感を持たず、精神医学的にも正常であるものと思われた。ただし、いずれかの尺度で高得点を示す患者においては精神医学的に問題を含む可能性があり、十

分な観察とケアが重要と思われた。

顎変形の種類別では、特に非対称の患者において他の変形症患者よりも抑うつ性尺度得点が5%の危険率で有意に高く、自尊心尺度が有意に低い値を示していた。これより、非対称は患者自身が直接確認しやすい変形であり、顔貌に対する劣等感をもちやすいのではないかと推察された。

術後は、全体としてMMPIのK尺度の得点が有意に上昇したが、その他の尺度には大きな変化はみられず、すべての尺度において平均的得点の範囲内に分布していた。また自尊心尺度は患者全体でわずかに上昇したが、有意差は認められなかった。変形別にみると、抑うつ尺度については、術前に高得点を示す傾向があった非対称群で術後に得点の低下がみられ、各群間での差は減少していた。また自尊心尺度に関しては、開咬群を除いて術後に得点の上昇傾向をみとめた。

これらの結果から、顎矯正手術は、形態変化を認識する患者の心理面に影響を与え、特に顔貌の非対称に対する訴えが強い患者においては人格特性にも変化を及ぼす可能性があると考えられた。

審査結果の要旨

顎変形症は、青年期の心理的に不安定な時期に顎変形が顕著になるため、自信の喪失や社会的適応の低下ならびに心理的障害をきたし易いと言われている。また、顎矯正手術は、良好な咬合状態と顔貌形態の獲得によって患者の心理にも良い影響を与えているものの、心理面に関する研究は少ない。さらに、顎矯正手術の満足度は、術者の技術的熟練によるばかりでなく、患者の身体的、社会的および心理的状态に大きく依存しているとも言われている。

本研究は、顎矯正手術を施行した顎変形症患者52名に対して、術前および術後約6か月経過時に質問紙法による人格テストの一つであるMMPI(ミネソタ多面的人格目録)およびRosenbergの自尊心尺度の測定を行い、それらの得点と顎変形との関連性について検討したものである。その結果、非対称の患者においては他の変形症患者よりも抑うつ性尺度が高く、自尊心尺度が低い値を示し、また術後は非対称の患者において抑うつ尺度が低下し、自尊心尺度では、開咬の患者を除き、全体に上昇する傾向が認められた。つまり、日常生活において自己確認する機会の多い正貌の変形が患者の人格に影響を及ぼすのではないかと考えられ、また顎矯正手術は形態変化を認識する患者の心理面に影響を与えている可能性が示唆されるなど、興味ある知見が示されている。

本審査では、顎変形症患者に対する心理学的測定の意義、MMPIとRosenbergの自尊心尺度の特徴と選択した理由、心理テストの施行時期、主訴と心理特性との関連、顎変形の種類や程度と心理特性との関連、顎矯正手術に伴う心理特性の変化、従来の報告と今回の結果との比較、心理検査が術後に不適応を示す患者のスクリーニングになりえるかなどについて質問を行ったが、いずれも妥当な回答を得た。また、本研究で示された内容は、顎変形症治療における患者の満足度を高め、手術成績を向上させる上でも有用な情報であり、より優れた顎変形症治療システムの確立にも反映できるものであることから、価値あるものと認めた。